

Title	H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガスティン・セント・クレアのキリスト教について
Author(s)	森田, 美千代
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 158-172
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5510
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』における

オーガステイン・セント・クレアのキリスト教について

森田 美千代

一 はじめに

レズリー・フィードラーが強調するように、『アンクル・トムの小屋』(Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly)』は、一般の人々が抱く印象とは違い、「驚くほど多面的で複雑な小説 (an astonishingly various and complex book)」であり、その主たる要因の一つはオーガステイン・セント・クレア (Augustine St. Clare) という人物の造型にある、と野口啓子は言っている。^② 筆者もまったくそう思う。オーガステイン・セント・クレアを研究の対象とするとき、少なくとも彼の生涯、彼の奴隷制論、そして彼のキリスト教論は、考察しなければならない。その際、どれをとってみても、実に複雑性に満ちている。しかも、オーガステイン・セント・クレアの場合、彼のキリスト教論は彼の奴隷制論と絡み合っているのです、その複雑性はなおのことである。

本稿の目的は、オーガステイン・セント・クレアはキリスト者として生きていくのに恵まれた環境のなかにいる(たとえば、セント・クレアの母、エヴァ、トムの存在) にもかかわらず、ながいあいだ宗教的冷笑と懐疑のなか

をさまよっていたが、ついに回心し、母がいる天の家に帰ることができたことを、テキストに即して、論証することである。

セント・クレアの奴隷制論は別稿で論じる予定であるので、本稿では、主として彼のキリスト教論について、論じることにする。とはいえ、セント・クレアがどのような生涯を送ったかは、いかなるセント・クレア研究においても基本になるので、最初に彼の生涯を述べておきたい。

二 オーガスティン・セント・クレアの生涯

オーガスティン・セント・クレアが、『アンクル・トムの小屋』の小説のなかで最初に登場するのは、第一章である。登場のしかたは、次の通りである。「船の乗客のなかに、ニュー・オーリンズに住む、資産家で由緒のあるセント・クレアという名前の年若い紳士がいた。五、六歳になる娘「エヴァ」と、親戚らしい一人の婦人「オフィリア」を伴っていたが、婦人のほうは特に女の子の世話をしているようだった」（二二六、一七八）³。セント・クレア自身が『アンクル・トムの小屋』の小説から消えるのは、第二十八章である。次のようにして、である。「魂がこの世を去る直前、彼「セント・クレア」は目を開けた。歓喜して何かを認めたときのように、突然目を輝かせ、『お母さん!』と言った。そして、彼はこの世を去った」（二七六、三七五）。

『アンクル・トムの小屋』の小説は、四五章から成っているので、セント・クレアは、最初から三分の一位のところで登場し、最後から三分の一位のところまで小説の舞台から消えたことになる。すなわち、セント・クレアは、『アンクル・トムの小屋』の小説の、なか三分の一のスパンで、生まれ、成長し、結婚し、そして死んでいるので

ある。

セント・クレアの生涯は、主として、父母との関係、兄との関係、妻との関係、エヴァとの関係、オフィーリアとの関係、トムとの関係によって、編み出されたといえる。エヴァとの関係とトムとの関係は、セント・クレアのキリスト教論に大きな影響を与えたので、彼のキリスト教論を論じることでとりあげることにしたい。また、オフィーリアとの関係は、セント・クレアの奴隷制論に大きな影響を与えているので、彼の奴隷制論を論じることでとりあげることにする。したがって、ここでは、父母との関係、兄との関係、妻との関係が、セント・クレアの宗教的（キリスト教的）生涯にどのように影響を与えたかを考察することにする。

セント・クレアの父の一族はカナダからアメリカに移住してきた（一三二、一八六）。セント・クレアの父はルイジアナ州の富裕な農園主であった。五〇〇人ほどの黒人奴隷を所有していた（二九六、二七〇）。正直で、精力的で、高潔で、鉄の意志の持ち主であった（一九五、二六八）。「神への尊敬の念はもっていたが、それ以上の宗教的感情はもっていなかった」（二九六、二七〇）。ここから、セント・クレアの父は、息子セント・クレアには、キリスト教の影響をほとんど与えることはなかったということができよう。

セント・クレアの母の一族は、フランスからアメリカのルイジアナに移住してきた。セント・クレアの母は、ユダノ⁴派のフランス女性だった（二三二、一八六）。

彼女は、「高貴で繊細な (noble and sensitive)」女性だった（一九七、二七二）。「青白い頬と深みのある目」（一九五、二六九）をし、「いつも白い服」を着ていた（一九五、二六九）⁵。

セント・クレアの母は、音楽の才能に恵まれていた。カトリック教会の古い荘厳な音楽をオルガンで奏で、かつ天使のような声で歌っていた（一九五、二六九）。このような彼女の影響を受け、セント・クレアは、のちに、彼の死の前、「古い荘重なラテン語の鎮魂歌『ディエス・イレ（Dies Irae）』」⁽⁶⁾を歌っている。その歌詞は、以下のごとくである。「おお、イエスよ、どのような理由で この世の悪意と裏切りを あなたは耐えられたのか、あの恐ろしい時期にも、私を見捨てようとはなさらなかった。疲れた足を急がせ、私を探してください、十字架の上であなたの魂は死を経験された、そうした労苦すべてが空しくなりませんように」（二七一、三六八―三六九）。ここには、イエスに対して悪意と裏切りを重ねてきたのに、あなた（イエス）は耐え、あなたは私（セント・クレア）を見捨てず、私を探してください、という、イエスに対するセント・クレアの思いが込められている。

セント・クレアの母は、聖書とともに生き、死んでいった（一五九、二二二）。特に新約聖書の具現者だった（一九五、二六九）。たとえば、彼女は、「イエスが盲人を治療している絵」（一九八、二七二）⁽⁷⁾を持っていた。彼女は、セント・クレアに、「この盲人は、乞食だが、イエス様は遠く隔たったところから彼をなおそうとはされず、自分のもとに乞食を呼び寄せ、彼の身体に直接自らの手を置かれた！」⁽⁸⁾と言っていた（一九八、二七二）。

このことに関して、のちに、セント・クレアは、次のように述懐している。「母の言ったことは本当ですね。盲人の目を見えるようにしてやろうと思ったら、私たちもキリストのように、すすんでやらなければいけないんですね。キリストは彼らを自分の元と呼んで、自らの手を置かれましたからね」（二四六、三三五）。

セント・クレアは、このような、母親の教えを通して、黒人奴隷や奴隷制とのかかわりを、学んだに違いない。しかし、実際には、彼は、冷笑的知識人として「見て見ぬふり」をして、生涯のほとんどを過ごした。

セント・クレアの母はまた、セント・クレアに、キリストが君臨しすべての人が自由で幸福になる千年王国（milli-

lenium) がやってくると語っていた⁸⁾。また、セント・クレアが子どもだったころ、「御国が来ますように (Thy kingdom come)」というマタイ伝にある祈りを唱えるように教えてくれた (二〇二、二七八)。

千年王国論とはいかなるものなのであろうか。歴史学者の岩井淳によれば、「千年王国論は、終末論の一形態である。しかし、この世の終わりを想定するだけでなく、終末前に千年間続く王国があると信じる点において、千年王国論は終末論一般から区別することができる。(中略) 千年王国論は、キリストの再臨を千年王国に先立つものと考える前千年王国論 (premillenarianism) と、再臨を千年王国の後におく後千年王国論 (postmillenarianism) とに、区分することができる」¹⁰⁾。「通常、千年王国論の典拠となるのは、旧約聖書のダニエル書や、新約聖書のヨハネの黙示録である」¹¹⁾。

母親エヴァンジェリンの千年王国論は、息子セント・クレアに受け継がれているだろうか。受け継がれたとは思えない。受け継がれたとすれば、それは、セント・クレアの娘エヴァに、「終末論」として受け継がれたといえよう。

兄は、アルフレッドといった。アルフレッドとオーガスティン・セント・クレアは、双子であった。彼らは、あらゆる点において、対照的であった。外形的には、アルフレッドは、「燃え立つような黒い瞳、漆黒の髪、力強いローマ人のような横顔、豊かな褐色の肌」であった (一九五、二六九)。彼は、「父のお気に入り」であった (一九五、二六九)。オーガスティンは、「目は青く、金髪で、ギリシヤ人のような顔立ちで、色白」だった (一九五、二六九)。彼は、「母に気に入られていた」 (一九五、二六九)。

彼らは、父の死後、農園主として、共同で農園を経営していた。しかし、のちに、セント・クレアは、農園の経

営者にはなれないことを、自覚した(一九九、二七三)。その結果、農園の経営はアルフレッドに任せて、セント・クレアは、「銀行の株とニュー・オーリンズの屋敷を所有して」(二〇一、二七六)、生活することになった。つまり、セント・クレアは、屋敷に黒人奴隷を所有する奴隷主にはなったが、農園主にはならなかった。農園主ではなかったというこの点は、研究者にも意外に看過されているといつてよいだろう。

セント・クレアの妻は、マリー・セント・クレアであった。彼女は、美しい容姿と輝く黒い双眸と一〇万ドルの持参金を持った女性だった(一三三、一八七)。彼女は、一言でいえば、「自己中心主義 (selfishness)」の女性だった。ストウは、マリーを次のように描いている。

マリーには、人を愛する能力とか人を思いやる感受性があるとはとても言えなかった。あつたとしてもそれはごくわずかで、しかもきわめて強烈かつ無意識の自己中心主義のなかに埋もれてしまっていた。その自己中心主義は、自足した鈍感さ、つまり自分以外の人間の要求にはまったく気づかないでいられるものだったので、どうにも手の施しようがなかった。幼いころから、ただ彼女の気まぐれに付き合うことだけをこころがけるといった召使たちに囲まれていた彼女には、ほんのかすかな形であれ、彼らにも感情があり権利があるのだなどという考えは起こりようもなかった(一三四、一八八)。

これまで述べてきたことをふまえると、セント・クレアは、いかなる宗教的(キリスト教的)人物であるといえるだろうか。セント・クレアの父は、息子セント・クレアには、キリスト教の影響をほとんど与えることはなかつ

たといえる。父と違って、母のエヴァンジェリンは、キリスト教の影響を与えることができたのに、そしてセント・クレアも母親に対して思慕と尊敬の念を持ち合わせていたのに、セント・クレアはキリスト者になることはなかった。妻マリーとは、終生心をかよわせることはできなかった。セント・クレアは、世俗的にも宗教的にも冷笑的・懐疑的知識人であり、また、理想と現実が乖離している人間であったといえよう。

三 オーガスティン・セント・クレアのキリスト者への変容

1 エヴァの果たした役割

セント・クレアとマリーとのあいだに生まれた子どもがエヴァだった。セント・クレアは、「自分の娘が自分の母親の姿を再現してくれることを願って、娘に母親の名前を付けた」(二三四、一八九)。つまり、セント・クレアの母とセント・クレアの娘は、同じエヴァンジェリンという名前であった。

エヴァが、いつ(幼児)洗礼を授けられたかは、小説のなかであきらかに記されていない。また、おそらく聖公会の教会(一五七、二一八)やメソジスト派の教会(二四二、三三一)の礼拝に出席していたことは小説からわかるが、どこの教会の会員であったかは特定できない。しかし、エヴァは、生まれながらにして、また小説に登場した最初から、宗教的な子どもとして、描かれている。セント・クレアの宗教的冷笑・懐疑主義とマリーの自己中心主義を考えれば、エヴァがなぜこのように宗教的であるのか、論理的には不自然であり、不思議なことである。しかし、はじめから、また本能的に、宗教的な子どもとして登場し、キリスト者として天に召された。

エヴァと聖書とのかわりであるが、最初トムを喜ばせるために聖書を読み、読んであげていた。しかしすぐに、

エヴァ自身が聖書そのものにひきつけられていった。「聖書のなかで彼女がもつとも気に入ったのは黙示録と数々の預言書の部分だった」(二二四、三〇八)¹²⁾。たとえば、エヴァは、「わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た」というヨハネの黙示録一五章二節を声に出して読みあげるといふ具合であった(二二六、三二〇)。また、エヴァは、トムに、ヨハネの黙示録を内容とする賛美歌を歌ってくれるように懇願している(二二七、三三〇)。

エヴァが黙示録にひきつけられているのは、エヴァが、セント・クレアの母から信仰的影響を受けていることを、ストウが強調したかったからかもしれない。しかし、ストウ自身は、そのことについて、何も説明していない。

エヴァは、自分の死期が近いことを悟り、「あとに残していくすべてのものを、悲哀に満ちたやさしさで思いやつた。とりわけ父親のことを。というのも、エヴァは、決して明確にそう思ったことはなかったが、自分は他の誰よりも父親の心を多く占めていると、本能的に感じていたからである」(二三九、三二六)という。

また、エヴァは、「パパは、わたしのところ『救い主イエス・キリストの家』へ来てくれるでしょう」と言った。セント・クレアは、「あとから行くよ。お前のことを忘れるものか」と言っている(二四二、三三〇)。しかし、さらにエヴァの死期が近づくと、セント・クレアは、「神様は、私のことをなんと辛くあしらうんだ!」と、言う(二五二、三四四)。「パパは、キリスト教徒よね、そうでしょう、パパ?」エヴァは疑わしそうに言った。「どうしてそんなことを聞くんだい?」「知らないわ。パパがこんなにいい人なのに、どうしてキリスト教徒でないのかがわたしには分からないの」「キリスト教徒であるってどういうことだい、エヴァ?」「何にもましてイエス様を愛することよ」とエヴァは言った。(中略)セント・クレアはそれ以上何も言わなかった。それは、かつて自分の母親の

なかにみてとった感情だった。しかし、彼の心の琴線はそれに対して何も反応しなかった（二五三、三四五）。

エヴァの最期の最後に、セント・クレアが発したことは、「ああ、エヴァ、何が見えるのか言っておくれ！何が見えるんだい？」であった（二五七、三五〇）。

エヴァの死後、セント・クレアは、「エヴァの部屋に座り、半開きの小さな聖書を目の前に掲げながらも、何の文字も言葉も目に入らないでいた」（二六〇、三五四）。また、セント・クレアは、自分の書齋で、「エヴァの聖書を少し離れたところに開いたまま置き、彼は俯せになっていた」（二六一、三五六）。

以上からいえることは、どういうことだろうか。エヴァは、天性的に宗教的な人間として、小説に登場している。エヴァは、聖書にひきつけられているが、そのなかでも黙示録にひきつけられている。エヴァは、キリスト者とは「イエス様を愛する人である」ときっぱり言い切っている。それに対して、セント・クレアは、この段階ではまだ、キリスト教に対して「ゆれて」いる。信仰と不信仰とのあいだを、「行きつ戻りつ」している。しかし、エヴァは、父セント・クレアを、信仰の「岸辺」まで連れていくことはできたといえよう。

2 トムの果たした役割

エヴァの死により、当然の成り行きであるといえるが、このあたりから、セント・クレアは、トムと、信仰のことについて話す。たとえば、次のようにである。

「旦那様が天を、いとしいエヴァお嬢様と敬愛する主イエス様のおられる天を、仰ぎ見ることさえできれば、ああ！」と、トムが言ったのに対して、セント・クレアは、次のように応答する。「ああ、トム！私も見上げている

んだよ。でも、問題は、私が見上げても何も見えないということだ。見ることができたらと思うよ」。(中略)「どうすればできるようになるんだろう?」と、訊く(二六一―二六二、三五六)。

「あなたは『これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました』とトムはつぶやく(二六二、三五六)。

「この聖書を信じたい。でもできないんだ。疑う習慣が身につけてしまっているんだよ」と、セント・クレアは言った(二六二、三五六)。

「主に祈りなさいませ。『信じます。信仰のないわたしをお助けください』(Lord, I believe; help thou my unbelief:)」と(二六二、三五六)。

それから、トムは、「ヨハネ伝一章のラザロの復活」の聖書箇所を読んでほしいと、セント・クレアに願う。

ヨハネ伝一章、特に二五節は、エヴァが死んだとき、葬儀で読まれた聖書の箇所である。すなわち、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。

セント・クレアは、トムに向かって、自分はトムよりもはるかにたくさん知識をもっているが、悪い習癖でやはり信じられない、と言う(二六三、三五八)。

それに対して、トムは、再び「お祈りなさりさえすれば! (only pray)」と言う。それに対して、セント・クレアは、「でも実際に私が祈っても、すべては**無に向かつて** (unto nothing) 話しかけているだけだ」と、答える。とは答えたものの、同時に、どんなふう祈ればいいのか見せてくれるように、トムに願う。トムの祈りの流れに乗って、セント・クレアは、「自分がくつきりと想像しているかのような天国の門まで運ばれていると思った。自分がエヴァのところへずっと近づいたように感じた」(二六三―二六四、三五八)と、感想を述べる。しかしすぐ、ト

ムに感謝のことはを発するや否や、トムに「いまは行ってくれ、一人になりたいんだ」(二六四、三五九)と言つて、トムを部屋から退出させる。

ここでも、まだ、セント・クレアは、信仰に対して、「ゆれて」いる。懐疑的である。たとえば、「何も見えない」「無に向かつて話しかけている」「知識をもっているが信じられない」と、セント・クレアは言っている。それに対して、トムは、「祈ってください」と応答している。

エヴァは、父セント・クレアを、信仰の「岸辺」まで連れて行ったが、トムは、そこから、セント・クレアを、「祈りの信仰」へと導きはじめることができた。

3 セント・クレアの回心

野口啓子は、セント・クレアのキリスト教への回心の軌跡の重要性を、指摘している。「この点〔セント・クレアのキリスト教への回心の軌跡〕は批評家にはほとんど注目されていないが、じつは、エヴァやトムの殉教よりもストウにとって重要だったと思われる」と言っている。^⑤ 筆者は、細部の点においては必ずしも考えを共有しているわけではないが、野口がセント・クレアの「回心」に着目していることを、高く評価するものである。

セント・クレアの最後は、唐突にやってきた。町のカフェに入り、夕刊の新聞を読んでいたとき、そこにいた二人の紳士が口論をはじめ、セント・クレアは仲裁に入ろうとして、致命傷を負った。

セント・クレアは、「私は死ぬ!」と言って、トムの手を握って、「祈ってくれ! (Pray)」と、懇願した。トムの祈りがすむと、セント・クレアは手を伸ばして、トムの手を取り、離さなかった(二七五、三七四)。

セント・クレアは、ここで、以前に母の影響を受けて歌った、鎮魂歌をとぎれとぎれに呟いた。「おお、イエスよ、どのような理由で、(中略)あの恐ろしい時期にも(中略)私を見捨てようとはなさらなかった。疲れた足を急がせ(中略)私を探してくださった(後略)」(二七六、三七四)。

セント・クレアの最期は、「ついに、家に帰るところだ！(I am coming HOME, at last)」であった。「美しい安らぎの表情が浮かんでいた。(中略)人々は、力強い手が彼の上に置かれるのを見た。魂がこの世を去る直前、歓喜して何かを認めたときのように、突然目を輝かせ、『お母さん！』と言った。そして、彼はこの世を去った」(二七六、三七四—三七五)。

セント・クレアの最期は、エヴァやトムの最期と違う。エヴァの最期は、次のようであった。「輝かしい栄光に満ちた微笑み(smile)がエヴァの顔に浮かぶと、彼女はとぎれとぎれに言った。『ああ、愛、喜び、安らぎ！(Love, joy, peace)』一息つく、死を越えて永遠の生へと去って行った！(passed from death unto life)」(二七六、三五〇)。トムの最期は、次のごとくであった。「誰が、誰が、誰が、キリストの愛からおらたちを引き離すことができましょう？」「ローマの信徒への手紙八章三五節」と、彼「トム」は命が衰弱するのに対抗するような声で言った。そして、微笑み(smile)を浮かべながら深い眠りについた」(三六三、四九二)。エヴァとトムの最期は、あきらかにキリスト者として死んだといえる。

四 おわりに

筆者の問いは、はたしてセント・クレアは、キリスト者として亡くなったのだろうか、である。「ついに家」天の家、つまり天国」に帰る！」と言ったそのところで、セント・クレアが『アンクル・トムの小屋』の小説の舞台から消えていたならば、彼は、まちがいにキリスト者として亡くなったといえる。しかし、セント・クレアの最期の最後のことは、「お母さん！」であった。「お母さん！」が付加されていることを、どう解釈したらいいのだろうか。

ながいこと、筆者は、『アンクル・トムの小屋』の小説の最後に出てくるこの「お母さん！」ということばを、キリスト者として消極的なことばである、あるいは否定的なことばであると、とらえていた。しかし、現在筆者が出した結論は、次のごとくである。「お母さん！」は、「天の家にいるお母さん！」である。そうであるとするならば、「ついに家に帰る」といったセント・クレアのことばは、「天の家にいるお母さんのところに帰る！」ということになる。したがって、「お母さん！」があることによつて、「ついに家に帰る」のインパクトがさらに強くなるということができよう。¹⁶⁾

注

* 「」内は、筆者の補ったことばである。

- (1) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Harmondsworth: Penguin, 1984), 264.
- (2) 野口啓子『アンクル・トムの小屋』の政治的感化力とキリスト教』『アンクル・トムの小屋』を読む——反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃——高野フミ編、彩流社、二〇〇七年、七八頁。
- (3) 英語テキストは、Elizabeth Ammons 編の *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly* を用いる。日本語訳は、主として、一九九八年に明石書店から出版された小林憲二監訳を用いる。しかし、場合によって、拙訳を用いている部分もあるし、一九六七年に旺文社文庫として出版された大橋吉之輔訳、一九六六年に角川文庫として出版された山屋三郎・大久保博訳、一九五二年に新潮文庫として出版された吉田健一訳を用いている部分もある。引用は、本文中に、英語の頁数と日本語訳の頁数の順序で示す。訳者名を特に明記していない場合は、小林監訳である。
- (4) 一六——一七世紀頃のフランスのカルヴィン派プロテスタント。
- (5) エヴァもいつも白い服を着ている少女として登場する。たとえば、(二四〇、三二八)を参照。
- (6) 最後の審判に関する聖歌。
- (7) ヨハネによる福音書九章を参照。
- (8) 至福千年説ともいう。世界史の終わりの来たるべき黄金時代(至福千年期)には、義人のみが復活を許されて暮らす神の国が、地上に千年間続くとする教説である(大貫・名取・宮本・百瀬編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、二〇〇二年、六九一頁)。University of Kent at Canterbury の Keith Carabine は、Wordsworth Classics 版の *Uncle Tom's Cabin* の四三〇頁において、このところの注を、次のように記している。「一九世紀中葉のアメリカは、大きな宗教的リヴァイヴアルと終末「思想」の渦中にあつた。だから、キリストの国がしきりに待ち望まれた。ヨハネの黙示録二〇章七——一五節とマタイによる福音書六章九——一三節の主の祈りを参照。」
- (9) マタイによる福音書六章九——一〇節を参照。
- (10) 岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社、一九九五年、二二頁。
- (11) 同書、一八頁。
- (12) エヴァがなぜ黙示録と預言書を気に入ったのか、ストウは、小説のなかで説明していない。
- (13) 『新共同訳 新約聖書注解 Ⅱ』によれば、「ヨハネが天上界で見た海には、ヨハネの黙示録四章六節には述べられて

いなかった『火が混じった』という形容句が加えられている。激しい裁き、天からの火と、獣と戦って勝利した殉教者の血の色が、この海に映っているであろう」（日本基督教団出版局、一九九一年、五三二頁）。

(14) マルコによる福音書九章二四節。

(15) 野口、七八―七九頁。

(16) David Reynolds 著 *Mightier than the Sword: Uncle Tom's Cabin and the Battle for America* の七四頁において次のように記している。“When he [St. Clare] exclaims “Mother!” as he dies, we presume he has joined the religious fold.” なお、「お母さん！」の解釈に関しては、斎藤薫氏とのテスカッションが、大きな助けになった。そのことを、ここに記して、感謝したい。